

イチゴ小型ポット（アイポット）育苗中期におけるクラウン部への杉バーク添加効果

○畑山とも子・山田芳文（大分農林水産研野茶研）

〔目的〕

イチゴの育苗に広く利用されている小型ポット（アイポット）では、定植時にはクラウン部が小型ポット内部に沈みこみ、定植直後の不定根の発生が遅れ活着がスムーズにいかない事例が見られる。そこで、苗の生産力向上を図るため、促成作型の育苗中期にクラウン部に杉バークを少量添加する処理が、定植後の生育促進や花数増加および早期収量に及ぼす影響について検討した。

〔材料及び方法〕‘さがほのか’、‘とよのか’を用いて2005年6月30日に挿苗し、発根後にオクダーク1袋を置肥した。8月5日に杉バーク30mL/ポットをクラウン部を中心に追加増量（以下、「杉バーク30mL添加」区として示す）するとともに「慣行用土量」区も含めてIB化成0.5gを追肥し、育苗期間中のN施肥量を330mg/ポットとした。間口6m、奥行き20mのビニールハウス内に設置した大分方式高設栽培システムを栽培本圃として用い、施肥は苦土石灰6kg/a、ロングトータルとスーパーロングをN成分で1:1の割合で全量基肥として施用した（N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=2.8:2.4:2.8kg/a）。花芽分化確認後の9月22日に定植し、栽植様式は株間20cm、2条千鳥植え、外成りとした。ビニール被覆は10月14日から雨よけ下、10月25日からサイドビニール開閉、マルチ被覆は10月14に行った。ハウス内

夜温は6℃以上とした。

〔結果及び考察〕定植時の苗の生育は‘さがほのか’、‘とよのか’ともに「慣行用土量」区、「杉バーク30mL添加」区ともほぼ同程度の生育で、クラウン径は「慣行用土量+杉バーク」区が「慣行用土量」区よりもわずかに大きく（第1表）、「杉バーク30mL添加」区の苗には杉バーク内に根群がみられた。‘さがほのか’での出蕾は「杉バーク30mL添加」区が「慣行用土量」区に比べて2日早く、花数が多く、収穫開始時期も早く、2芽率はやや高かった（第1表）。

‘とよのか’での出蕾は「杉バーク30mL添加」区、「慣行用土量」区ともに同時期で、花数も差がなかったが、「慣行用土量」区に出蕾のばらつきがあり、収穫開始時期が遅れた（第1表）。頂花房の商品果収量は‘さがほのか’、‘とよのか’ともに果数、果重は「杉バーク30mL添加」区が「慣行用土量」区に比べて優った（第2表、第1図）。第2花房への影響は明確ではなかった。

以上のことから、促成作型の小型ポット育苗において育苗中期に杉バークを慣行用土量に追加すると、活着促進、花数の増加によって頂果房収量が多くなる傾向が認められ、‘さがほのか’でその効果が高いことが明らかであった。

第1表 小型ポット育苗における用土増量が苗の生育と出蕾、花数、出蕾に及ぼす影響

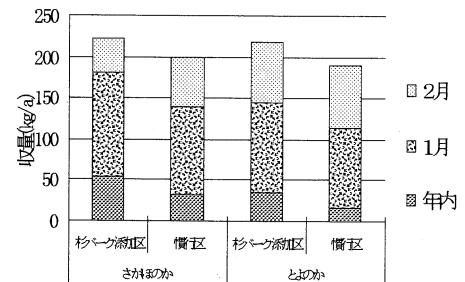
品種	処理	苗の生育					頂花房			第1次腋花房
		葉柄長 (cm)	葉長 (cm)	葉幅 (cm)	葉色 (SPAD値)	クラウン径 (mm)	出蕾 (月日)	花数 (個)	収穫開始 (月日)	2芽率 (%)
さがほのか	杉バーク30mL添加	12.6	9.7	6.9	37.5	9.2	10/25	13.5	12/14	25.0
	慣行用土量	13.0	9.3	6.7	38.0	8.9	10/25	11.7	12/22	15.8
とよのか	杉バーク30mL添加	13.9	8.3	7.4	33.2	8.9	10/31	22.1	12/24	42.9
	慣行用土量	14.1	8.2	6.5	33.6	8.5	10/31	22.0	1/7	50.0

注) 苗の生育は9月16日調査

第2表 小型ポット育苗における用土増量が収量に及ぼす影響

品種	処理	頂果房		
		果数	果重	1果重
さがほのか	杉バーク30mL添加	13.2	295.7	22.4
	慣行用土量	11.4	262.1	23.0
とよのか	杉バーク30mL添加	18.6	312.6	16.8
	慣行用土量	15.8	271.0	17.2

注) 頂果房の単位は個/株, g/株, g



第1図 用土増量が収量に及ぼす影響